

環境先進国ドイツの「ヴォーバン住宅地」から学び、 “コンパクトシティ”とエネルギー自給・省エネ住宅の 実現を考える

●少子高齢化、人口減少社会がもたらす地域格差

ドイツ・フライブルク市にある「ヴォーバン住宅地」は、世界的に注目されている持続可能な住宅とまちづくりプロジェクトです。なぜいま、「ヴォーバン住宅地」に学ぶ必要があるのでしょうか？日本では、少子・高齢化と共に、人口減少がますます顕著になってきています。つまり、国の税収が持続的に増加することはあり得ないのです。さらに時間の経過とともに社会福祉的な支出が増加することは避けられません。一方、国家の負債も急増しており、将来的に負債返済の圧力も増加していきます。

こうしたなか、社会福祉的なサービスは低下していきます。これは、医療や介護などのソーシャルネットに関わる物事だけでなく、教育機関の縮小やレベル低下、道路や情報サービスなどのインフラにいたるまで、これまで公共が提供してきたサービス全般が重点施策のみに限定され、地域格差が広がっていくということでもあります。

●クラブヴォーバンは、コンパクトシティを提案します

このような理由から、クラブヴォーバンでは、第一次産業に従事・関連する人びとの農村での暮らしを肯定し、サポートする必要性を認識しつつも、第二次、および第三次産業に従事・関連する大多数の人びとは、都市において、できるだけコンパクトで持続可能な都市社会を築く方向性、“コンパクトシティ”を提案しています。

同時に、先進国並みの経済成長を目指す途上国の自然が著しく劣化する前に、日本が世界に対して「人口密度が高くとも、豊かで持続可能な都市、社会」をいち早く提示する必要があると考えています。



クラブヴォーバン10のコンセプト

～都市におけるランドデザインの基本的な考え方～

1. 適度な人口密度による住宅地の実現
2. 地域性や地形、既存の樹木や植生、既存建物を最大限生かす
3. 住宅地のアイデンティティ確保のための、住宅地の活気ある中心部、商業施設と雇用の確保
4. カーフリー（カーポートフリー）での住宅地設計
5. 近自然工法による住宅地内の緑地（公園など）の確保
6. 屋上緑化などの対策を盛り込んだ雨水コンセプト
7. コンポストを主軸とした住宅地内での廃棄物処理
8. 省エネ建築様式（高密度・高断熱）による住居設置の義務化
9. 地域や集合住宅単位でのエネルギー発電・発熱
10. コーポラティブを主体とした集合住宅の実現

一人ひとりが考えていく それがクラブヴォーバンです。

創設メンバーからのごあいさつ

日本のまちづくりを
変革するために

日本では高度成長期を終えた段階から、年齢別の人口動態の傾向、とりわけ急速に加速する少子高齢化に対応するため、新しい都市計画、まちづくり、そして住宅政策を行うべきでした。さらに90年代からは気候温暖化、および化石燃料のピークという問題も追加されたため、この新しい取り組みは、緊急に必要なものでした。

しかし残念ながら、これまでのところ新しい政策は何も始まっていません。ゾリ貧となることがプログラムされている日本のまちづくりの未来を変革するため、この「10のコンセプト」を基本にした都市計画やまちづくり、そして住宅政策が行われることを期待しています。

club Vauban
ファウンダー
村上 敦（むらかみ あつし）

ドイツ・フライブルク市在住の環境ジャーナリスト。ドイツにおける環境政策やまちづくりについての著作活動や、日本全国での講演活動を行っている。フライブルク地方役所・建設局に勤務の後、フリーライターとしてドイツの環境政策を日本に紹介。専門分野は、環境に配慮した自治体の土地利用計画、交通計画、住宅地開発計画、自治体レベルのエネルギー政策、気候温暖化対策。著書に『カーシェアリングが地球を救う』（洋泉社）、『フライブルクのまちづくり-ソーシャル・エコロジー住宅地ヴォーバン』（学芸出版社）、『豊かな暮らしと子供たちの世代のための低炭素住宅』、『日本版グリーン・ニューディールへの提言』（EOLWAYS）。

村上 敦 WEBサイト
<http://www.murakamiatsushi.net>

本当の意味で世界に誇れる
住宅づくりを考えたい

かつて、日本の建築物、特に木造建築物は世界に誇れる技術を持っており、それが反映された建築物が多く存在していました。しかし、戦後に大きく様変わりし、大手主導で、利益追求型の住宅販売を行ってきた結果、山は荒れ、技術を持った職人さんの仕事は減り、機械化された工場出荷の住宅が氾濫しました。気が付くと日本は先進国でも最低の家とまちづくりが行われる国になってしまいました。

日本の住宅の寿命は25年後。欧米では60年、80年の寿命が当たり前です。エネルギーコストの面でも、ドイツに比べて日本の住宅性能は7分の1もしくは10分の1くらいの性能という極端な差がつかまされた。

クラブヴォーバンは、あくまでもクラブです。未来の子供もたちが安心して生活できる“まち”を、国を、そして地球を残す。そのためにはどうしたらいいかを一人ひとりが考えていくクラブにしたいと思います。

club Vauban
代表理事
早田宏徳（そうだ ひろのり）

マングローブクリエーション(株)代表取締役。91年陸上自衛隊 少年工科学校卒業。建材メーカー、ゼネコンの下請け工務会社を経て、山梨No.1、宮城No.1の2社ビルダー取締役13年間で3300棟の住宅お引き渡し。09年に独立後、平日は工務店、設計事務所などに向けて年間100回超のセミナーを開催。また、週末は一般の方を対象にセミナー・個別相談会を開催。環境問題にも精通し、環境NPO法人の理事も努める。毎日新聞、東北電力、大阪ガス、トステムなど数多くの企業の主催するセミナー講師を行う。

マングローブクリエーション株式会社
<http://www.mangrove.com>



エネルギー自給型の住宅
素敵で楽しいまちづくりを
ソーシャル・エコロジー型のモデルとして

私が初めてフライブルクを訪れたのは1997年9月。ヴォーバンはまだ建設計画が始まったばかりでした。ソーラーでエネルギー自給を考えたプラスエネルギーハウス、古い町並み、昔からある大きな樹木をどう生かそうかなど、様々な案があふれていました。

フライブルクは環境都市と言われていますが、学生の町でもありますので何か自由な発想があふれているような気がします。朝早くから朝市が開催され、あちこちで綺麗な花々が咲き誇っています。私が、朝、散歩した時には教会で結婚式が行われていました。

数年後、ヴォーバンに再度訪れた時には、路面電車が開通し、古い町並みを残しながら、新しい素敵な町に変わっていました。公園には「バン」焼き窯が設置されていたり、省エネ住宅をはじめ、屋上緑化、太陽熱利用などが設置されていました。

その他、公共駐車場のガレージの上には太陽光発電、町の中心には木質バイオマス利用の施設がフル稼働していました。

「ヴォーバン」それは住まい方を大切に素敵な町でした。それぞれの国、地域にはそこにあった住まい方があるはず。そのような素敵な町を皆さんと一緒に創りあげること。それがクラブヴォーバンです。

club Vauban
理事
柴田政明（しばた まさあき）

株式会社エイワット代表取締役。自然エネルギー協会会長。関西環境取引所 代表理事。NPO法人EEネット理事長。NPO法人次世代エネルギー研究所副理事長。NPO法人環境エネルギー農林業ネットワーク再生可能エネルギー部長。福岡大学非常勤講師。1994年エイワット代表取締役就任後、デンマーク、ドイツで環境政策、再生可能エネルギー技術を学ぶ。2001年坂本龍一らとともにArtists'Powerを立ち上げ、自然エネルギーの普及推進を始める。国内に限らず、マレーシア、上海、パプアニューギニア、マダガスカル共和国など、海外とも連携をはかり、未来の子供たちへ、たくさん選択を残すべく精力的に活動中。

EIWA
<http://www.eiwa.co.jp>